

福岡・香椎^{かしい}B遺跡

- 1 所在地 福岡市東区香椎字寺熊他
- 2 調査期間 第一次調査 一九九五年(平7)四月～一九九六年六月

- 3 発掘機関 福岡市教育委員会

- 4 調査担当者 下村 智

- 5 遺跡の種類 集落遺跡

- 6 遺跡の年代 平安時代末～戦国時代

- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



調査地は、旧郡名では筑前国糟屋郡香椎となる。福岡平野の東辺部を画す多々良川から東は、三群山系の博多湾までに達する丘陵によって占められ、丘陵間には幾つかの谷地形がある。その中で香椎川水系によって形成された谷は幅一〇〇m、奥行き二〇〇mの規模を呈し、やや蛇行気味に東西方向に延びる。

西方は開口して博多湾に面し、東方は低い峠を越えて宇美、大宰府へと通じる。この谷の海岸から一〇〇〇mほど奥には『香椎宮編年記』によると神功皇后を祭神として神龜元年(七二四)に建立された香椎宮(廟)が位置し、さらに宮から五〇〇mほど谷奥に香椎B遺跡が立地する。

調査は宅地開発に伴うもので、計画地内にある中世山城の御飯山城が立地する丘陵などを切り崩して谷を埋め、三〇万㎡の宅地を造成するものである。一九九五・九六年で谷部二万二〇〇〇㎡の調査を終え、現在は山城の調査中である。

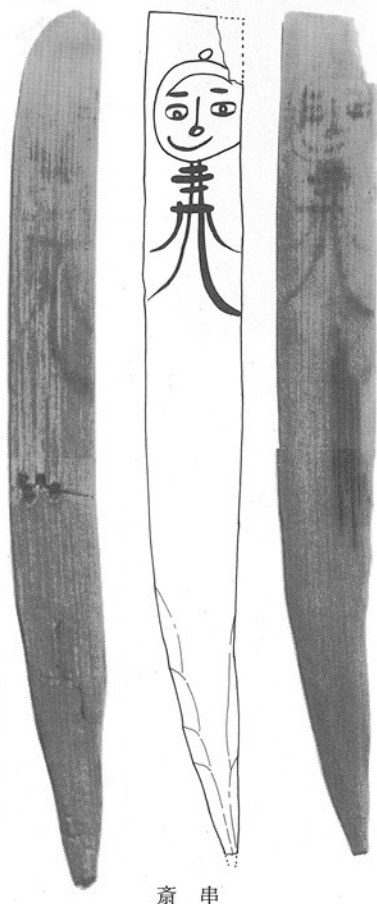
調査の結果、平安時代末から戦国時代の掘立柱建物・井戸・溝・土壙墓・堂跡などの遺構が確認された。また、奈良時代～一六世紀の須恵器・土師器・備前や常滑産の陶器・中国産陶磁器の他に、木簡・生活用具や祭祀関係の木製品、瓦類の多種多様な遺物が、各遺構や整地土層から出土した。

調査地の谷は、南側の三分の一程が未調査のままに宅地となったため不明な部分を残すが、これまでの調査結果から遺構の変遷を概観すると次のようになる。

平安時代後半期には、微高地に掘立柱建物が認められるものの、整然と区画された地割は出現せず、自然流路や溜り、一部には水田が残る。しかし、遺構としては検出されなかったが、安楽寺所用軒丸瓦や大型鬼瓦などの瓦類が出土しており、当地での寺院・公的施

設の存在が考えられる。一一世紀後半、遅くとも一二世紀初頭には本格的整地作業が始まり、谷部における屋敷群が形成されている。一二世紀には、墨書の磁器が多く出土し、寺熊地区に宋人の屋敷の存在を知る。遅くとも一三世紀には南北方向の溝や柵によって区画され、調査地中央部の寺熊地区には大型の掘立柱建物を中心とした屋敷が出現する。一四世紀後半～一五世紀前半には、生水地区において、掘立柱建物の主屋、馬屋、仏堂などからなる屋敷が出現する。寺熊地区には小堂の礎石建物が認められる。この間、溝は幾度も開削され（南北溝SD一〇〇など）、そのために敷地の規模にも変遷が認められる。一六世紀には小規模な建物からなる集落となり、小堂も廃絶して墓地となる。

木簡は、谷部が屋敷地として一二世紀以降に大規模造成される以前に存在した自然流路SD一〇三（一二世紀）、自然流路に伴う溜りSX七七一、一二世紀の初期造成時の区画溝である南北溝SD七一〇、一五～一六世紀の区画溝である南北溝SD一〇〇から合計七点出土した。このうち最後のSD一〇〇出土の木簡は、SD一〇三からの紛れ込みの可能性が高い。自然流路からは、木製品として多量の箸・椀・曲物などの生活具のほかに、小型卒塔婆・舟形・刀形などの祭祀関係品や、仏画を墨書した斎串と思われる木片も二点出土



した。一点は長さ（二三三）mm、幅二六mm、厚さ三mm、もう一点は、長さ（二三六）mm、幅二三mm、厚さ三mm。それぞれ片面に顔などが描かれて、下端部を尖らせているが、上端は一点は方頭、もう一点は丸い圭頭である。

8 木簡の釈文・内容

自然流路SD一〇三

(1) ・「寛治七年（題籤）」

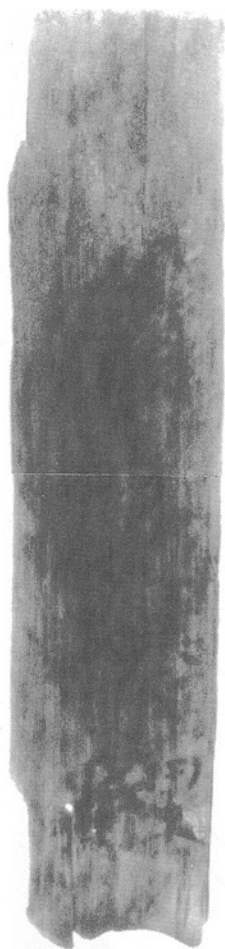
・「□文□米」

(74)×20×6 061

(2) 講筵一枚 衆一房 みな一タ □

□ □

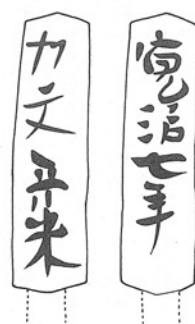
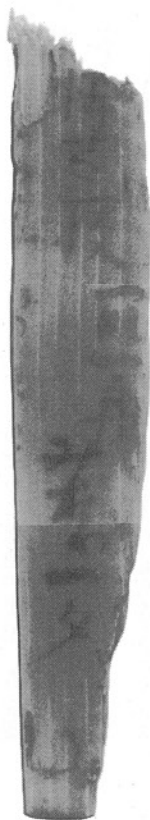
(194)×(34)×6 081



(3)



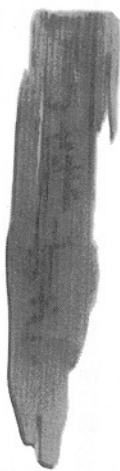
(2)



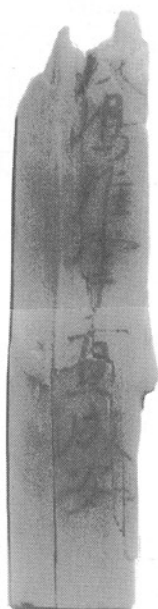
(1)



(7)



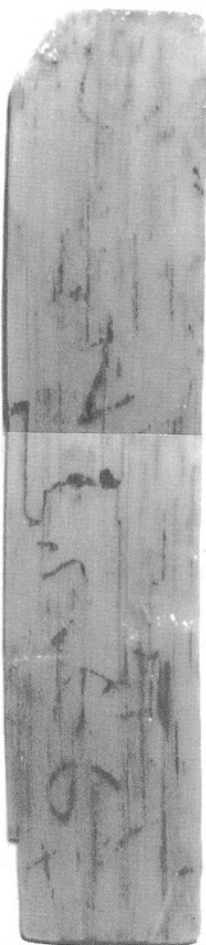
(4)



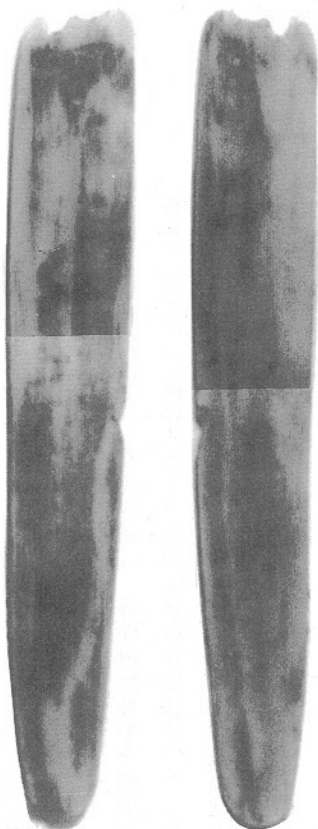
- (3) 異異異」(他ニモ判読不明ノ重書アリ) (220)×49×2 019
- 溜りSX七一七
- (4) 〔岐カ〕
〔嶋雑掌直成安〕 (145)×(36)×4 081
- 南北溝SD七二〇
- (5) 〔□ □ □の□〕 220×46×3 011
- 南北溝SD一〇〇
- (6) ・井□寺前 〕 (133)×19×5 059
・四斗一升□□〕
- (7) 〔三斗七升□米 (108)×(22)×3 081
- (1)は軸部を欠失する。寛治七年は一〇九三年。
(3)は習書か。判読が不能なほど多数の文字を重
書きしている。(4)は頭部を破損して嶋名が不明
であるが、嶋岐嶋が妥当であろう。「直成安」
は嶋岐嶋のいわゆる国雑掌と考えられ、注目さ
れる。本遺跡と嶋岐嶋との直接的関係は不明で
あるが、同嶋には香椎宮が存在し、文献にも香
椎宮との関連を窺わせる記事を散見することが

でき、下層遺構の性格を考える上で興味深い資料である。(5)は習書
か。(6)の寺前の墨書は、鎌倉期の寺院の所在を示唆する資料である。
木簡の釈文については、九州大学の佐伯弘次、九州歴史資料館の
倉住靖彦両氏のご教示を得た。

(瀧本正志)



(5)



(6)